響け念仏　北の大地に

本願寺帯広別院だより

2023（令和５）年 11月号

〒080-0803 帯広市東３条南５丁目３　TEL：0155（23）3720
FAX：0155（21）4989　発行人：輪番・仲尾信博

別院ホームページ
http://www.betsuin.jp/ →

よみがえる「赤いお屋根」

秋の十勝晴れに恵まれて本堂屋根の工事は順調に進み、写真の９月下旬は塗装も佳境となっていました。

大屋根は本堂建立から64年後の１９９４（平成６）年に改修工事が行われ、風雪への耐久性が高い横葺きカラー鋼板になりました。約30年が経過したこの度の工事では、全面葺き替えも検討しましたが、大きな錆や欠損がないことから再塗装することになりました。まず、「赤いお屋根」の表面を高圧洗浄器で洗い流し、紙やすりなどで磨きをかけて下地を調整。錆止め塗装をし、シリコン樹脂系塗料を２回塗りして仕上げます。色については役員の方々と相談し、30年前より少し明るい「ディープ・レッド」を選択しました。

10月下旬には仮設足場の解体が始まったので、仮設物撤去が完了すると、本堂は正面から出入りできるようになります。お参りの際は、鮮やかに輝く赤いお屋根はもちろん、美しく仕上がった軒裏天井や化粧垂木も見上げてご覧ください。

11月のご案内

報恩講	13日（月）～16日（木）	〈本堂〉

12月のご案内

月例布教	１日～３日13時30分	〈講堂〉
宗祖月忌法要	15日・16日13時	〈本堂〉
おすすぎ払い	24日７時	〈本堂〉
除夜会	31日23時30分	〈本堂〉

仏婦の報恩講

10月13日（金）11時、仏教婦人会報恩講をおつとめしました。

多くのご出席があり、賑やかな報恩講となりました。さいごに「報恩講の歌」を斉唱しました。お斎は皆で作ったカレーとおさがりの柿。「みんなで食べると美味しいわ」「婦人会の醍醐味ね」などと、喜びの声があふれていました。

「一人いてしも　よろこびなば
二人と思え　二人にして
よろこぶおりは　三人なるぞ
その一人こそ　親鸞なれ」

「報恩講の歌」の詞のとおり、親鸞聖人とともに喜ばせていただきました。

本堂建物補修工事

雪止めは厳選箇所に新設

屋根に設置されていた、錆び付いた雪止め４００個余り全てを撤去しました。雪止めは大切な金具ですが、雪が長時間にわたって屋根に残ると、築90年を越える本堂への負担は相当なものになります。そのため、北側には設置をやめるなど、個数を厳選し、新設するのは94個としました。

別院玄関ホールに、長年風雪に耐え錆び付いた雪止めと、新設する現物を展示しています。どうぞ手に取ってご覧ください。

雪止め。左から、西日で著しく錆びたもの、北側の雪でゆがんだもの、新設のもの

帰敬式のご案内

来年厳修される「帯広別院親鸞聖人御誕生８５０年・立教開宗８００年慶讃法要」に合わせて帰敬式（おかみそり）を執り行うこととなりました。

このご縁を機に、是非とも受式されますようご案内します。

- ●期日　令和６年５月19日（日）
  帰敬式：午前11時～12時頃
- ●場所　帯広別院　本堂
- ●冥加金　１２，０００円
  18歳未満　６，０００円
- ●申込締切　３月19日（火）
- ●帯広別院受付に備えつけの「帰敬式受式願」に必要事項をご記入のうえ、お申し込みください。

※法名の内願を希望される方は「内願書」を記入し、押印のうえ、別途１０，０００円を添え、２月19日（月）までにお申し込みください。

自他ともにたいせつな言葉紹介　人我兼利（じんがけんり）

天上天下唯我独尊（てんじょうてんげゆいがどくそん）

これはお釈迦さまが生まれた時におっしゃった言葉です。

自分よりも偉い者は天上にも天下にも存在しないという、かなり強気の発言にも思えます。生まれながらにして、この世での自分の存在や使命を感じられたのでしょうか？

いいえ、そうではありません。「我」はお釈迦さま一人のことではなく、私たち人間のことを指しています。つまり、尊いのはすべての人間で、価値のない人などいないということを表されているのです。天上天下唯我独尊は、決してお釈迦さまの生意気な一言ではありません。

価値のない人などはなく、生まれてきたからには尊い仏さまになるようにと、背中を押してくださっているように感じます。

（桐林）

僧侶総力取材 interview

帯広別院本堂の欄間はメイド・イン・帯広だった？

清水邦吉さん

別院の事務所でこんな会話がありました。

「本堂の立派な欄間。あれって帯広の人が作ったらしいよ」

「まさか。京都とかで作って、送ってきたんじゃないの？　昭和初期の帯広に欄間の職人さんなんて、いたのかなあ？」

調べてみると、欄間は清水仏具店から納められていました。当時の清水社長（初代）は仏具販売をする塗師（木地に漆を何度も塗って仕上げる職人）で、芽室町の寶照寺の宮殿や欄間も清水さんが納められたようです。さっそく、清水仏具店3代目社長、清水邦吉さん（寶照寺総代）にお話をうかがいました。

別院本堂の絢爛豪華な欄間。咲きほこる蓮華が彫刻され、金箔が施されている

職員　帯広別院の欄間は、初代社長が彫刻して、納められたんでしょうか。

清水さん　祖父米吉は石川県金沢市の出身で、漆を塗り、金箔をかける塗師でした。20歳で渡道してきました。昭和3年に帯広別院が本堂を建立することになり、北海道に例のない大きな本堂の欄間を米吉が制作することになりました。1枚が9尺（約270センチ）にもおよぶ欄間を9枚、納品させていただきました。仕事は厳しく吟味され、納品価格も厳しかったようです。9枚の内の1枚は清水仏具店から寄贈したそうです。

職員　高い技術をもった職人さんが帯広におられたんですね。欄間の制作はお一人でされたのでしょうか？

清水さん　いえいえ、祖父が職人さん数名を束ねていました。中でも彫刻師の徳光さんという方は、国会議事堂にも彫刻を納める凄腕の職人さんだったと聞いています。祖父の本職は塗師ですが、彫刻もしていました。

職員　冬の帯広は極寒ですから、ご苦労があったのでは？

清水さん　木地の自然乾燥に苦労したそうです。半地下室におがくずを入れて温度を一定に保ち、乾燥させたようです。金箔を張るには部屋を閉め切り、念入りにおこなわなければいけないので、冬はほとんど仕事ができなかったようです。冬に仕事が入ると、漆には石炭ストーブが適さないため薪ストーブを使うなど、工夫をしていたようです。彫刻材料の檜は本州から取り寄せるので、手配や輸送は大変だったようです。

職員　最後に、米吉さんとの思い出深いことがあればお聞かせください。

清水さん　祖父は私が幼い頃から「この子がうちの三代目」とかわいがってくれました。大学卒業後、東京の仏壇屋で修行し、戻ってきて半年で祖父は往生しました。私の帰りを楽しみにしてくれていた祖父でした。祖父の手がけた仕事は今なお輝いていて、頭が下がります。尊敬しています。祖父がいつも言っていた「私たち職人の仕事は5年や10年で評価されるものではない。100年たって評価される」の言葉に、職人としての情熱を感じています。

ご法話

なもあみだぶつ

文：池上宗恵

阿弥陀さまという仏さま。いつでもどこでも見まもっていてくださる仏さま。このいのちが終わるその時には、阿弥陀さまの国、さとりの世界、お浄土に私を生まれさせ、仏さまにしてくださいます。

私は3人の子どもに恵まれました。どの子もすっかり大きくなり、あれだけ大変だった子育てを懐かしく感じるこの頃、ふと思い出したことがあります。それは、まだ子どもたちが私の膝の上を取り合いするくらい小さな頃のこと。

長女「パパ・ママ、だ～い好き」

ママ「知ってるよ！　ママも大好き。人ってね、自分の名前を呼ばれるのが大好きなんだって。生まれてから一番あなたの名前を呼んでるのは、だれ？　パパとママでしょ？　だからパパとママのこと大好きだって知ってるんだよ」

私「なるほど」。妻と出会って十数年。私の名前をいちばん呼んでくれるのは妻だ。だからか、と納得。

さて、私もいろんなご縁をいただいて、仏さまと出会い数十年。

「なもあみだぶつ」と呼び続け。

阿弥陀さまは知っていてくださるのです。この私が大好きなことを。悲しみ涙するときも、下を向いているときも、前を向けなくても、「だいじょうぶだよ。わたしにまかせてね」とよりそってくれるパパ・ママのような仏さまのことを。

11月 オススメの一冊

『ねえ、ぎゅっとして』

著：富田富士也　絵：浅倉田美子／北水刊／113頁／1300円＋税

教育心理カウンセラーとして有名な富田富士也さんの詩集です。娘が幼稚園に通っていた頃、妻が当時の園長先生に勧められました。園長先生によるお悩み相談会があり、妻は毎回参加していたのです。その会で聞いて、妻が今でもよく口にする言葉が「子どもが嫌がるまで親は子どもを抱きしめてあげなさい、いくつになっても、子どもから離れる日まで」。親はいつの間にか欲深くなっています。生まれた時は「生まれてきてくれてありがとう」だったはずなのに、他人と比べたり、勝手にがっかりしたり……そんな時この本を思い出します。

子育ての指南書でもないのに、何となく呟かれた言葉が絶妙に淡い挿絵と一緒に目に心に染み、「あーそうだよね。分かるーその気持ち」ってなる一冊です。（渡邉）